

学内広報

2020.8.25

no.1537



岩手県の宮古市立重茂中学校 (→p6)



志ある卓越。



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

東京カレッジ シンポジウム・ダイジェスト コロナ危機を越えて

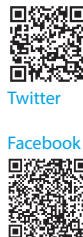
コロナ禍における学生同士の支え合いとは？

ピアサポーター座談会2020

東京カレッジ「コロナ・フォーラムⅢ」総括シンポジウム・ダイジェスト

コロナ危機を越えて

コロナ危機とその後の世界を考える際に重要な6つのテーマを設定し、それぞれについて専門家同士が座談会形式で議論を繰り広げた、東京カレッジの連続シンポジウム「コロナ危機を越えて」。各セッションでコーディネーターを務めた6人の先生と、東京カレッジ長の羽田正先生、東京カレッジの若手研究者、そして五神真総長も参加した総括シンポジウムが7月8日に行われ、YouTubeライブで配信されました。当日の様子の一端を抜粋して紹介します。



= 医学・疫学 = シンポジウム①6月17日

区別した情報開示でInfodemicを防ぎたい

日本感染症学会理事長の館田一博先生、日本集中治療医学会理事長の西田修先生と私で議論しました。館田先生からは、無症状のキャリアの存在が問題を難しくしている、市民のメリハリのある行動容で感染症伝播を減らすべきだ、との指摘が。西田先生からは、日本の救命率が高い水準にあるが、医療現場はギリギリの状態であり、通常診療の縮小を余儀なくされて病院経営を圧迫している、との指摘がありました。セッションのまとめとして確認したのは、いわゆるInfodemicの問題です。Misinformation（誤報）とDisinformation（偽情報）が合わさって不確かな情報が伝染病のように広がってしまう。これを防ぐため、アカデミアとして正確な情報を提供するのはもちろん、科学的に明らかであることとそうではないことを区別して開示することが重要だと確認しました。



医学系研究科教授 南学正臣

= 価値 = シンポジウム③6月25日

「良き統治」で民主主義のアップデートを

私たちは、17世紀のペスト、20世紀の第一次世界大戦とスペイン風邪、現在のCOVID-19を通して、価値の問題を考えました。総合文化研究科の武田将明先生は、デフォー『ペストの記憶』を訳し始めた2011年と現在の状況がよく似ており、この本は正解が見えない状況での人の振る舞い方を示している、と指摘。経済学研究科の小野塚知二先生は、個人の行動を監視する技術が進み、安寧な生が保証されるかわりに人権・自由・私権の価値が形骸化している、とCOVID-19の世界史的位置付けを概観。社会科学研究所の宇野重規先生は、緊急事態においてなお民主主義が機能しうること、疫病を通じて行政権と生命を管理する政治権力が拡大し、安全・経済・自由のトリレンマがあることを報告。無責任の体系に陥ることのない「良き統治」で民主主義のアップデートを進める必要があることを確認するセッションとなりました。



東洋文化研究所教授 中島隆博

= 暮らしと社会 = シンポジウム②6月23日

コロナ禍は暮らしを本来の姿に戻す好機

環境工学の小熊久美子先生、建築史の加藤耕一先生、公共政策大学院の大橋弘先生と、コロナ危機で暮らしと社会が得たものと失ったものについて、また、コロナ危機をいかにインクルーシブ社会形成に結びつけるかについて議論しました。まず、デジタル技術には、リモートでも生活や業務が継続できるといった「功」の部分がある一方、自分の欲するものしか見なくなるといった「罪」の部分もある、と整理。Diversity（多様性）とRedundancy（冗長性）をどう考えるかという文脈では、With-の期間が長いコロナ禍が、社会システム全体のリデザインチャンスとなるとの指摘がなされました。階層や所得に基づくDistancingの克服に向けては変動要因に対応できるagileな計画が必要であり、コロナ禍は労働や子育てや寝ることに単純化した戦後社会の暮らしを本来の姿に戻す好機になるだろうという話に帰着しました。



工学系研究科教授 横張 真

= 経済 = シンポジウム④6月26日

生命と経済の両立のためにデータが重要

経済学研究科の渡辺努先生と岩本康志先生、社会科学研究所の川田恵介先生、一橋大学の宮川大介先生と、コロナ危機で何が起きているのかを議論しました。消費はコロナ禍の前と後でそれほど変わっていない可能性が高い、グローバル化や機械化の影響を受けにくかった業種でも雇用が失われている、生命と経済のトレードオフがかつてない規模で問われているといった現状を確認。現状把握にも政策立案にもタイムリーなデータが必要であること、民間のデータも使用して分析することが必要であること、プライバシーの配慮と活用を両立する上で大学の役割が大きいこと、生命と経済の両立のための施策でもデータとエビデンスが重要であることなどを、今後の課題として整理しました。経済学モデルが他の分野より遅れているのはデータ不足が要因だとの指摘もあり、データの価値をあらためて感じたセッションでした。



経済学研究科教授 星 岳雄

総括シンポジウムは安田講堂大会議室に用意された特設スタジオにて17時から行われました。最初にコーディネーターの羽田先生が会の概要と次第を説明した後、シンポジウムを開催した順に6人の先生がマイクを握り、各セッションについての報告を展開。「お一人8分以内で」という羽田先生の要請に応え、各90分のセッションをぎゅっと濃縮した6つの報告は、スケジュール通りに進りました。予定が少し狂ったのは、その後に行われた、東京カレッジに所属する2人の若手研究者が6人の大御所それぞれに質問を投げかける質疑

応答パート。豊かな国際性を備えた2人が入念に仕込んだ鋭い質問を矢継ぎ早に繰り出したため、自ずと6人の大御所たちの応答も熱を帯びることとなったのです。羽田先生が討論を引き取ったときには残り時間が20分弱。満を持して発声した五神総長は、話に聞き入ってしまったこと、東京大学ビジョン2020を構想した際には話を大きくしすぎたかと思っただがいまはそれでよかったと思っていること、

変化がつかないほど大きい現在は知を活用するチャンスであること、グローバルコンズをテーマにしたセンターを構想していることなどを紹介し、知を結集してコロナ危機を越えていく決意をあらためて表明しました。

最後に羽田先生が、今後も信頼できる情報を集めて分析し、東京カレッジで様々な発信をタイムリーに行う、と展望を述べ、2時間の内容の濃いシンポジウムに幕を下ろしました。



シンポジウムの動画はYouTubeで閲覧できます

= 若手研究者との一問一答 =



東京カレッジ特任助教
赤藤詩織



東京カレッジ特任研究員
フラヴィア・バルダリ

バルダリ たとえば無症状感染者の情報など専門家の異なる意見が社会を混乱させる場合もあります。専門家はどうか行動すべきでしょうか。
南学 確実にわかっていることとおそらくこうであるということ、きちんとわけて説明するのが大事だと思います。メディアはどうしても単純化してしまう。専門家の側が注意しながら情報を出すべきでしょう。

赤藤 オンラインでのつながりが増えたいま、ウィズコロナ社会のなかで対面で会うことの価値はどう再定義すればよいでしょうか。

横張 オフラインでは得意なことや嫌いなことにめぐり合います。そして、そこにこそ創造性に関わるヒントがある。予定調和的でないこと、偶発的なことに接する可能性の高さが対面の価値だと思います。

バルダリ 民主主義のアップデートとはどのようなものなのでしょうか。

中島 思い返せばPandemicとは「全ての民衆」の意。中央集権型の民主主義、分権型の民主主義など、いくつかの姿を踏まえた上で、全ての民衆が現前するPandemic Democracyが一つの答となるでしょう。

赤藤 経済学では家事労働のデータが抜け落ちています。たとえばGDPにも反映させるべきだと思いますがいかがでしょうか。

星 実は家事労働の側面を含めた経済理論もあり、アメリカでは20年ほど前からデータに取り入れてきています。ただ日本ではこれから。家事労働がデータ化できていないのは大きな問題だと私も思います。

赤藤 個別の具体的な物語はどうすればデータ化できますか。無理やり数値化すると抜け落ちるものが出るのではないのでしょうか。

味埜 福永先生の言葉を借りると「不確実性のなかで透明性をもって確実性を追求する」。客観的状況に基づき文脈を判断する、複数の話から共通項を選ぶなどにより、質的情報の本質を見抜く必要があります。

バルダリ データを理解するという点について、どうすれば専門家は一般の人々とコミュニケーションをうまくとれるのでしょうか。

渡部 一言では答えられない難しい質問です。データの全体を理解するのは常に困難ですから、目的を限定するというのが一つのやり方。専門家が使う目的を限定して説明することがまずは有効だと思います。

= SDGs = シンポジウム⑥6月30日

いまこそ利他性や公共性が重要

コロナ危機は社会の脆弱性を突いており、その克服を目標としたSDGsとポストコロナの関連が私たちの論点でした。国連大学の**沖大幹**先生は、コロナ禍をSDGs未達の言い訳にするな、グローバル経済下で一連托生の各国は感染症に強靱な世界を作るために協力せよ、また、自国主義の台頭でワクチンを全世界に公平に提供できるかが試練と主張。教育学研究科の**北村友人**先生は、教育に関するゴール4をコロナ禍が脅かしており、平等・公正な教育を超えた包括的教育、社会変革に寄与する柔軟な学びが必要と指摘。新領域創成科学研究科の**福永真弓**先生は、誰も取り残さないというSDGsの理念の実現には、科学的根拠や数字になる前の個別具体の物語が必要と訴えました。以上の議論の根底にある利他性や公共性がいまこそ重要なことが指摘され、SDGsを目標ごとに分断すべきではないこともコロナ禍を通じて示唆されました。



東京カレッジ特任教授 味埜 俊

= 情報活用と管理 = シンポジウム⑦7月3日

データ利活用とガバナンスは車の両輪

私たちはデータに集中して議論しました。医学系研究科の**大江和彦**先生は、感染症の早期症例データ収集システム整備とリアルタイムレポート収集、電子カルテと接続して経過を追跡するなどの施策を提案し、医療データ利活用への期待を報告。工学系研究科の**和泉潔**先生は、駅の密集度と経済の関係や院内感染など、細かい空間でのモニタリングとシミュレーションが可能になっていると紹介し、予測のアナウンスが人の行動に影響する可能性も指摘。法学政治学研究科の**宍戸常寿**先生は、パーソナルデータの活用に際し、プライバシーvs公衆衛生の安易な図式に逃げ込んではいけないこと、行政や医療サービスの面で国民にメリットが還元される仕組みであるべきことを紹介。討論では、外縁がはっきりせず多義的な特徴を有するデータの特性を踏まえ、データ利活用とガバナンスは車の両輪と捉えるべきであることなどを確認しました。



大学執行役・副学長 渡部俊也

コロナ禍における学生同士の支え合いとは？

ピアサポーター一座談会 2020

2015年度に始まった東大のピアサポート活動。学生有志の皆さんが、講習を経てピアサポーターとしての認定を受け、仲間(Peer) 同士による支援活動に携わっています。これまでに積み重ねてきた活動の様子と、コロナ禍における最近のオンライン活動の現状を、4人の現役ピアサポーターに集まってもらい、Zoom座談会で聞きました。青と黄色のジョウロにこめられた想いとは？



<https://ut-psr.net>

——順番に自己紹介をお願いします。

貞村 私は困窮している人のところに向いて問題を解決するような弁護士を目指してきて、学生同士で支え合う活動の考え方に共感して参加しました。今年2月から活動を始め、7月から代表を務めています。

単位も欲しくて参加しました

山本 私は2015年12月から活動していて、現メンバーでは最古参ですね。もともと人の話を聞くことに興味がありましたが、シラバスで東大のピアサポート活動を知り、講義を取って認定を受ければ単位をもらえるのはいいな、と思って始めました。専攻ではスパコン関係で性能向上の研究を行っています。

田村 去年受けた心身の実践科学の授業にピアサポーターが来て活動を紹介したことがあります。その後は忙しくて忘れていましたが、1月に必修の単位を取り終わって時間ができました。それでびあサポを思い出し、会話能力を磨きたいと思って2月から参加しました。

河 私は博士課程から東大です。前の大学の修士課程で指導教員がピア・サポート学会の理事で、私もピアサポートの研究をしていました。東大に来てオリエンテーション冊子で知り、2018年6月から活動しています。

——現体制と活動内容を教えてください。

河 現在96人が登録しています。びあサポラウンジ、ストレスチェック、本祭り、よもやま語りゼミ、メルマガ、相談機関ガイド、東大生支援ニーズ調査、広報など、プロジェクトごとのチームがあり、ほかに柏、駒場とキャンパス別のチームもあります。

山本 びあサポラウンジは、ライブラリプラザに集まって、エコバッグやブックカバーな

どのものづくりをしながらおしゃべりする企画です。ちょっとした居場所を提供しようという趣旨で、2019年6月から行ってきました。ものづくりといっても、既成品にスタンプを押ししたり絵を描いたりする軽いものです。

哲学の学生が「よゼミ」を発案

河 歴史が長いのは、唾液アミラーゼの測定機で判定するストレスチェック活動。本郷では2017年10月から法文1号館前にテントを設営して年に1~2回行っています。一番参加者が多いのは、総合図書館と連携して2018年から年1回行っている本祭り。不要な本を募り、ほしい人に無料で配布していて、前は800冊ほど集まりました。昨年度始めたよもやま語りゼミは、話題を設定して語らう場です。たとえば、飲めない人は飲み会でどう振る舞うか、田舎に住むか都会に住むか、将来の計画はたてたほうがいいのか否か、など。哲学専攻のサポーターが発案しました。

山本 予備校になじみがある東大生を意識して「よゼミ」と呼んでいます。

貞村 私は、学内の各種相談機関の紹介を学生目線でつくる相談機関ガイドチームと、月に一度メルマガを発行するチームで活動していますが、4月からすべて活動はオンラインです。この2つについてはコロナの前後でそれほど活動内容は変わりませんが、びあサポラウンジはオンライン談話室へと姿を変えました。マイクのON/OFF、ビデオのON/OFFも自由のZoomミーティングです。

山本 オンライン化の際は、Zoom荒らしなどの懸念もあり、東大生だけが安心して参加できる仕組みが必要でした。アカウントの問題はもちろん、匿名での誹謗中傷を避ける工

法学政治学研究科
専門職学位課程2年

貞村真宏さん



教養学部
文科三類2年

田村天さん

びあサポラウンジの様子。大人になるとあまり使わなくなる文房具類を使ったものづくりをするうちに話が弾み、やすらぎの時間が到来するという寸法



法文1号館前に設置されたストレスチェック会場。ストレスを受けると交感神経系の直接的作用の一つとして唾液アミラーゼが分泌すると考えられます



情報理工学系研究科
修士課程2年

山本 周さん



教育学研究科
博士課程3年

河 美善さん

ストレス調査の結果はテキストを統計的に分析して表示するフリーソフト(KH Coder)なども用いて視覚的にまとめられています。https://ut-psr.net/2020/07/07/stress02/



夫とか、話に詰まったときの対処も含めて。

河 4月に白熱した議論をしましたね。オンラインだと私たちが場の雰囲気をつくるのにも限界があるので、参加者ポリシーを定めました。誹謗中傷はしない、録画録音はしない、というような約束に同意した人だけにZoomのURLを教えるという手順にしたんです。

貞村 深刻な話になった場合、対面だと学内の相談機関につながりますが、オンラインの場合にはどうするのかという話もしましたね。

河 サポーター同士で役割を決めて話す練習もしました。参加者が陽気な人ばかりで入りづらいという状況を設定したりして。

田村 私が活動している駒場チームは、以前は1・2年生向けに活動していましたが、前期課程だとサークルやクラス活動が盛んということもあり、あまり活動できていませんでした。今年度から後期課程の人や駒場IIの大学院生も対象に広げ、新企画として始めたのが「あつまれ駒場の部屋」です。面白いオンラインのアクティビティを持ち寄る場です。

——アクティビティというのは、ゲーム？

Zoomで盛り上がる遊びを探索

田村 第一回では「リレー小説」をやりました。主人公の性別や年齢などの設定を決め、一文ずつ皆がZoomのホワイトボードに書いてつなげていくというものです。このときは、大学生が朝、学校に行くのがだるい、親に会うのも面倒で……という内容になりました。あと、検討したのは「専門用語しりとり」とか「イカ東おえかき」とか。本祭りチームでは、参加者が好きな本を紹介しあうVirtual Book Festaという企画もやっています。

——新型コロナにともなうストレス調査というのもやっていましたよね。

田村 学生目録でアンケートを取ることがストレス改善につながる、とストレスチェックチームが5月に調査を実施し、260件の声が集まりました。1年生では対人交流がしたいという声が大きかったです。理系だと受験も本郷なので駒場に来たのは手続きの一回だけという人も多く、入学の実感がわかないようです。ストレス発散法を訊ねる質問では、運動が27%と最多で、緊急宣言後に始めたことを訊ねる質問でも1位は運動。コロナ禍で運動を始めた東大生が多かったようです。

——ピアサポーターとして話すときに気を

つけていることは何ですか？

田村 相手の意見を阻害しないようにしています。あと、内輪ネタにならないようにも。

貞村 個人の属性に関わることは、本人が話したがらない限り深入りしないようにしています。争いの起きにくい話題、たとえば食べ物の話などはよくしますね。食べ物つながりなら出身地の話などにも広がります。

田村 研究の話もよく弾みます。知らない分野を知ることができて自分もお得ですね。東大生であることが一番の共通事項なので、東大ネタを話題にするとスムーズです。オンライン授業の話とか、期末テストの話とか。

——ジョウロのマークにはどんな意味が？

貞村 以前、サポーターがつくった案をもとに投票をして選ばれたと聞いています。種類や育ち方の異なる互いの芽に水を注ぐような活動組織を目指すという意味がこめられています。多様性を受け入れた上で各々が支え合い、よりよい学生生活を送れるよう、ジョウロの水のような存在になりたいと思います。

ジョウロを志して活動理念を策定

河 昨年度、活動理念を定めました。東大生が満ち足りた学生生活を送ることを大切に、「1.心身の健康 2.居場所づくり 3.人とのつながり 4.役に立つ情報の交換 5.自己理解の深化 6.多様なものの見方の獲得」の6つに寄与することを目指すことを目指すと明文化しました。

山本 何か新しい企画を考える際に判断の基準となるものとして定めたいです。

——では、現在の課題は何でしょうか。

田村 まだ認知が低いことです。参加のハードルもある。相談なんて必要ないと思っている人も多いでしょうが、不安があるから来る、じゃなくていいんです。相談事がなくても気軽に参加できる場と認識してもらいたいです。

河 私たちが目指す支え合いのキャンパスでは、困っている人を助けるだけでなく、困る前からつながりを持っておくことが大切です。

田村 たえばサークルだと何かをやるという目的があり、その目的を取るとコミュニケーションが進みにくいでしょう。でもピアサポート活動は交流自体が目的。そこに、私たちならではの支援のヒントがある気がします。

貞村 特に困っていなくても、自分がさらに満ち足りるために使ってほしい。そういう場として知ってもらいたいと思っています。




海と希望の学校 in 三陸

第9回

三陸を舞台に、岩手県大槌町にある大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センターと、社会科学研究所とがタッグを組んで行う地域連携プロジェクト—海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域に希望を育む人材を育成するという文理融合型の取り組み—です。3年目を迎えたわれわれの活動や地域の取り組みなどを紹介します。

広がる「海と希望の学校」の連携の輪 ～宮古市立重茂中学校との連携・協力協定～

吉村健司  大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター
特任研究員

2020年6月30日に国際沿岸海洋研究センター（以下、沿岸センター）と宮古市立重茂中学校（以下、重茂中）との間で、「海と希望の学校 in 三陸」に基づく連携・協力推進に係る協定の調印式が行われ、沿岸センターの青山潤センター長と重茂中の石積康弘校長が協定書にサインを交わしました。調印式には、宮古市教育委員会の教育長や、重茂漁業協同組合の組合長もご臨席いただきました。また、メディアも数社訪れ、調印後のインタビューでは青山センター長や石積校長への質問が1時間以上も続き、関心の高さを窺い知ることができました。なお、沿岸センターが、特定の初等、中等教育機関と「海と希望の学校 in 三陸」に基づく協定を結ぶのは初めてのことです。



今回の協定に至ったのは、私の重茂地区での調査がきっかけでした。私は沿岸センターに着任した2017年以降、毎年6月に重茂地区の例大祭で調査を行ってきました。例大祭では、重茂中の生徒による伝統芸能の「剣舞」と「鶏舞」が披露されます。2019年の調査の際、重茂中の石積校長と佐々木副校長とお話する機会があり、そこで「海と希望の学校 in 三陸」について説明をしました。後日、佐々木副校長から、重茂中学校において「海と希望の学校」の授業依頼の連絡をいただき、2019年9月の出前授業に至りました。

調印式の様子（右が青山センター長）



2月に行われた出前授業（玄田有史先生）

これまで重茂中では、2019年9月に「地域づくりワークショップ」、2020年2月に社会科学研究所の玄田有史教授と共に、「希望学」の出前授業を行い、また、懇談する機会を持つことができました。重茂中では2020年からそれまでの学校教育目標を見直し、「海と希望の学校」に変更しました。学校教育目標が変更されるというのは、珍しいことだそうです。調査中に交わした言葉は僅かでしたが、ここまで話が進むとは、私としても非常に驚きでした。



重茂中に在籍する多くの生徒の両親や祖父母が、漁業に関わっています。なかには、漁業の仕事を手伝ってから登校する生徒もいるといいます。こうした話を

聞き、重茂の子供達にとって、海は今でも非常に身近なものなのだろうと推察しています。そうした子供たちに、今後は、沿岸センターのスタッフによる様々な実習を通じ、三陸の海の理解を深めてもらう予定です。2020年9月中旬には重茂中での出前授業と、沿岸センターでの二日間の実習が予定されています。

今後は、今回の協定を機に、沿岸地域の初等・中等教育機関へと連携、協力の輪を拡げていきたいと思います。そして、「海と希望の学校 in 三陸」を通して、子供たちに三陸の海についての様々な知見を提供するとともに、我々も子供たちから地域の視点について学んでいき、ともに三陸の海の魅力を発信していきたいと考えています。



教育目標「海と希望の学校」の横断幕を掲げる重茂中

重茂での調査の一幕



「海と希望の学校 in 三陸」動画を公開中→ YouTube サイトで「海と希望」と検索！

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

※1535号の本欄内の記載「JR釜石線」は正しくは「JR山田線」でした。



部局長だより 第10回

～UTokyo 3.0 を導くリーダーたちの横顔～



社会科学研究所・生産技術研究所編

社会科学の総合知を共同で追求

法学、政治学、経済学、社会学の4分野の研究者が問題意識を共有しながら社会科学の総合知を追求する。それが社研の使命です。特徴は、個別に行う専門分野基礎研究、グループ共同研究、全所的プロジェクト研究という3層での活動。まとまりがよいと言われるのは、日常的に行う共同研究の賜物かと思えます。1965年から続く全所的プロジェクト研究は、テーマを決め、3～4年かけて研究所全体で共同研究を行い、書籍にまとめるもの。直近では2016年開始の「危機対応の社会科学」の成果が7月に完結しました。所員同士の雑談からテーマを育てるのが伝統ですが、コロナ禍で対面の場が減りました。歴代所長も注力した蛸壺化しないための努力を怠らず、間もなく新プロジェクトを始めます。



社会科学研究所長
佐藤 若夫 趣味: 建物鑑賞

1996年に始めた、社会調査データを学内外から預かって公開する事業を着実に進める一方、社会科学の英語専門誌 *Social Science Japan Journal* 刊行に加えて、昨年度から社会科学の英文図書刊行支援事業を始めました。候補の選定、出版社への橋渡し、編集上の助言、契約業務まで担う専任教員を配置し、昨年11月にはキックオフシンポジウムと相談会を行いました。水準は高いのに英語での発信が少なかった日本の社会科学のプレゼンスを世界で高めていきます。

30年先を見通す将来構想を検討中

昨年の70周年を契機とする取組みを進めています。この4月、千葉実験所を大規模実験高度解析推進基盤に改組しました。歴史の長さゆえ例外的な面もある組織だったのを見直し、教員ポストを配して、大規模実験に加えて情報系やシミュレーションなどの研究も強化した形です。糸川英夫



生産技術研究所長
岸 利治 趣味: 旅行

先生のロケット研究の縁がある6自治体と昨年7月に設立した科学自然都市協創連合では、大漁旗プロジェクトを始めました。地域の魅力や夢を表現する旗を各自治体が制作し、船に乗せて各地を巡り、最後に安田講堂に集結させる試みです。

人事の点では、URAに力を入れています。教員と事務の連携をより強化できる人材を増やし、全体のアクティビティが向上しました。在宅時間が長い親のために広報室がSNSで展開した生研の研究に関するクイズなどはその好例ですね。

2017年を境に始めたのが、30年後の百周年を見据えた将来構想の議論です。6月に本部に提出した「ビヨンド2020」用の構想案を叩き台に、9月に行うパネルディスカッションを経て、今年度中に策定する予定です。これまで屋台骨を支えてこられた先生方の定年退職が続くので、中堅・若手世代への期待は大きいです。約120の研究室がさらに力を発揮するためにも、一体感をもって将来構想を議論していきます。

UTokyo 第21回 バリアフリー最前線!



熊谷晋一郎室長が
取材原稿で伝える
障害研究の現場⑧



応答、多様性、越境

：バリアフリーなアカデミアに向けて

都市の人々は、隣人を人間扱いしているだろうか。東京生まれ、幼いころから他人を石ころのように扱う都会の人混みが苦しい西成氏は、渋谷駅の雑踏で倒れ病院で検査を受けたことさえあった。また、数学に没頭する少年時代、必ずしも裕福ではなかった両親は内職をしながら応援したが、ある時「東大まで行って数学をして、何の役に立つの？」と聞かれ自問した。これだけ与えられる中で、好きなことだけやっていいのか——でも、数学がやりたい。

先端科学技術研究センター
西成活裕 教授の巻



応用数学を志し理科I類に入学。流体力学を専攻するも「何の役に立つの？」という声は疼き続けた。そんな時「苦手だった人混みを、流体現象としてとらえられないか」という着想に至る。しかしそれは新領域を立ち上げることであり大きなリスクを伴った。悩んだ末に、尊敬する先輩の「人生は諦めるかやり抜くかの2つしかない、7年はやれ」という言葉に背中を押され、20代後半で大きく研究テーマの舵を切る。縦割りのアカデミアで分野横断的な研究は支援を得にくく、4年ほど持ち出しの状況は続いたが、徐々に注目されるようになった。

流体には流量＝密度×速度という関係があり、横軸に密度、縦軸に流量を取ると、増加から減少に転じる臨界点が観察できる。氏は世界ではじめて臨界点を越えた状態として様々な渋滞を定義し、人や車だけでなく、物流やバブル崩壊、セルロース分解過程に至るまで、数多くの現象を解き明かしてきたが、最初の応用例は巧妙に渋滞を回避するアリの研究だった。のちにある養蜂家にアリが渋滞しない理由を尋ねたところ「彼らは同じ個体から生まれた家族だからだよ」と教えられた。アリが実現している個と全体、利己と利他のバランスを人間社会に実装することが渋滞学の最終目標だ。それは、個として数学を愛しながら、同時に「何の役に立つの？」という声に応答し続けてきた氏ならではの到達点かもしれない。

社会課題に多分野が共同して応答するのではなく、個別領域に閉じて業績を積み上げるアカデミアに対しても、変革が必要だと強調する。それはまさに、氏が苦勞しつつ歩んできた道でもある。社会への応答、多様性、越境——バリアのない力強い知の実践がここにある。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第171回

RELAY COLUMN

医学部・医学系研究科
財務・研究支援チーム上席係長 **酒井恵美**

バレーは常に上を向くスポーツです



自席でパチリ (撮影：武内さん)

赤門から入って正面の建物、医学部2号館（1936年11月竣工）で昨年7月より、外部資金（主に政府系委託費）の申請から受入、執行、報告までを担当しています。担当は私を含めて9名の大所帯ですが、周りの皆さんに助けられながら日々業務を行っております。運営費交付金が減少傾向にある中、外部資金獲得の大切さをひしひしと感じております。

20数年前、大分大学へ採用された時は、将来東京大学で働くことになるとは、しかも、現在のような在宅勤務が続く状況になるとは、思いもありませんでした。新しい働き方、生活様式で、安心して働ける環境作りを目指したいと思います。

プライベートでは、若い頃、バレーやテニスをやっていましたが、最近、息子の体育の授業をきっかけに、10数年ぶりにテニスラケットをにぎりました！思うように身体がついていかない……ので怪我しないようにしたいと思います。

次の春高バレー、開催されるといいなあ……



得意ワザ：家族の遺失物を発見すること
自分の性格：熱しやすく沼にはまりやすい（オタク気質かも？）
次回執筆者のご指名：高橋元さん
次回執筆者との関係：気の合う同級生
次回執筆者の紹介：癒やし系イクメン

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

第14回 附属図書館柏地区図書課長 **樋口秀樹**

手書きの「学会誌」



「M.M.」の署名から、村松操によるものと推定される（第7号）

柏図書館は、「博物之友」という手書きの雑誌を所蔵しています。この、「博物之友」は、東京府立第一中学校（現在の日比谷高校）の生徒であった市河三喜（英語・英文学者・昭和15（1940）年6月15日～昭和21（1946）年10月4日の間東京帝国大学附属図書館長であり総合図書館の貴重書疎開の陣頭指揮も執る）、村松茂、村松操（のち東条操）、小熊捍まもるの4人の発起人により立ち上げられた「日本博物学会」の手書きの回覧雑誌です。初号は明治33（1900）年5月25日に発行されており、内容は、動植物の採取記、昆虫のスケッチ、投書欄などから構成され、1世紀以上前の好奇心に満ちあふれた中学生たちが触れた昆虫や植物等の様子が記されています。このほか、会則、投稿規程、輪見（回覧）方法、閲覧日数、会員名簿などが記載されており、学会がどのように活動していたかを読み取ることもできます。

なお、「博物之友」は、明治34（1901）年5月までの1年間で8号が手書きで作成されましたが、会員数が50名以上に増加したことなどから翌6月から印刷版の「博物之友」へ移行し、学会の名称も「日本博物学同志会」に改められています。手書きの「博物之友」は、日本博物学会事務所が置かれていた市河三喜の自宅で保管されていたものを、ご親族から2019年に東京大学への寄贈のお申し出があり、柏図書館において貴重書として保管することとなったものです。



第4号の投書欄

また、印刷版の「博物之友」は、全国15館の大学図書館で所蔵されていますが、1部しか存在しない手書き版は柏図書館のみの所蔵となっております。なお、手書きの「博物之友」は、著作権保護期間満了もしくは公開許諾が得られた記事等についてデジタルでの公開を行っておりますので、インターネット上で手軽にご覧いただくことが可能です。

<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/hakubutsunotomo/>

インタープリターズ・第156回 バイブル

総合文化研究科 准教授 豊田太郎
科学技術インタープリター養成部門

Responsible Research and Innovation の当事者意識

縁あって科学技術インタープリター養成プログラムに参画させていただいて4年になる。この間、本プログラムの講義や様々な活動に触れたり、マスメディアに関わる経験もしたりして、あらためて、自分の立場は社会の中で極めて少数派だと自覚した。私は他の人と比べて、分子については割と明るい方だ（驚かされることも大変多いが）。新型コロナウイルスに関しても、続々と報告される文献から、顕微鏡像で構造をみて、ゲノムの塩基配列やいくつかのタンパク質の機能を知ること、少しだけ安心した（もちろん現在の感染状況に予断は許されない）。大学院生の頃から、生命現象に関心をもち、原始細胞に思いを馳せて化学の研究をしてきた。私が少数派としてこの研究に従事できていることはとても有り難い。

最近、Responsible Research and Innovation (RRI) という言葉^{*}に触れるようになった。これは、社会の価値や期待に沿うように、透明性をもって研究やイノベーションを進めるものとする科学コミュニケーションや科学技術ガバナンスの試みだという。私もRRIの意義は理解できるので、少数派である自分の立ち位置に胡坐をかいてられない。学生にも、「身近な家族に自分の研究を説明して理解してもらえよう」に研究内容を深く理解し発表してほしいと伝えてきた。

しかし、あらためて今、私の家族や身近な地域の方々に、自分の研究テーマの価値を責任をもって伝えられるかと問い直してみると、その気概はもちろんあるが、正直なところまだ難しいとも感じる。SNSやクラウドファンディングなどで研究テーマを発信すれば、様々な階層の社会から応答が得られる昨今ではある。ただし、それに適応する術は個人の能力に依っていて、少なくとも私はその術をもっていると言え難く、自ら学んでゆく他ない。よって、新型コロナウイルス禍に際し、今年初頭から国内外にメッセージを強く発信してこられた感染症専門の先生方や医療従事者の方々には、感謝し、また敬服の念を抱いている。そのメッセージから私自身のRRIの何たるかも学べるからである。

^{*} 標葉隆馬「責任ある科学技術ガバナンス概論」ナカニシヤ出版、2020。

科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpretor.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し! 文書館

The University of Tokyo Archives
ぶんしよかん



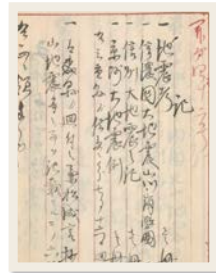
第27回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

研究資料、東京大学にかく集へり

東京大学の膨大な研究資料群は、近年デジタル化による積極活用が進んでいます。では、それらは如何にして本学に蓄積されてきたのか。今回は、東京大学設立後間もない明治10（1877）年の、地質学研究資料の事例を「文部省往復」より紹介します。

発端は、設立から一か月、5月25日付文書で、法文理三学部総理加藤弘之から文部省へ、地質学研究のため「内国火山地震等之事ヲ記載セル書類文書」貸与（贈写後返却）の依頼でした。これを5月31日付で文部省から各省・府県へ照会し、資料収集が開始されます。



「文部省往復」より
(S0001/Mo020/0103)

司法省・内務省から「群書中から探し出せない、人員を派遣せよ」、「該当記述がある書名を示せ」と即答、6月に大学が調査員を派遣します。海軍省からは「兵学校に海外の分なら……」と回答がある一方、北海道開拓使からはライマンの「北海道地質報文」が提供され、各省庁の個性が反映された結果ができました。

また各府県も活躍します。照会の翌日、東京府からは「地質研究に益するか不明だが、安政地震の難民救助の文書なら」と行政文書管理の鑑のような回答があり、長野県からも7月2日には善光寺地震関係等10冊分の資料が送付されます。また、三重・青森・愛知・群馬の各県は「県庁に該当文書なし」のため地域調査を行ない、県庁職員や地域住民の個人所蔵資料を続々提供しました。さらに栃木県では、調査をしても伝説や「老爺之口碑」しかないと嘆き、代わりに明治6年の大蔵省噴火願末届を探し出しました。各県の文面を紹介できないのが残念ですが、最先端の学術貢献への強い意思が伝わる筆致です。そして、12月25日付で照会回答完了、業務完結しました。

さて、その後これらの資料はどうしたのか。答えの一つが、地震研究所図書室の特別資料データベースに見ることができます。例えば長野県が提供した「地震後世俗語之種」は「地災撮要」地震之部巻ノ二(L001077)に所収され、彩色絵図は今も鮮やかです。さらに関連資料には、明治10年以降も同様の収集が行なわれた可能性も。今後、資料情報連携により、さらなる発見が期待できそうです。現在の学術資産のルーツ、文書館の記録から探ってみませんか。

(助教・秋山淳子)

東京大学文書館 www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features,Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
7月10日	医学部附属病院	バーチャル空間におけるがん患者さん同士の相互支援プログラムの実証研究を開始
7月14日 ～8月11日	本部広報課	日本選手第一号から1976モントリオール大会まで 淡青色のオリンピックたち 日本のオリンピックを支えた東京大学の人々 日本のオリンピックを支えた東京大学の施設 / 「オリパラと東大。」 サイエンスへの招待・人工知能 vs. 脳 (高橋宏知) サイエンスへの招待・医薬アクセスの観点から考える (榎田祥子) / 「淡青」41号より
7月16日 ～8月6日	広報戦略本部 情報理工学系研究科、公共政策大学院、先端科学技術研究センター	光は「道具」ではなく「素材」。分野を絡み合わせた研究が新たな可能性を拓く 世界を見渡し、日本を見つめる「戦略的コミュニケーション」の研究者 行政システムの透視図を描き出し、見えてきたものを社会に伝えたい UTOKYO VOICES 093-95
7月17日	薬学系研究科・薬学部	核酸系抗生物質ヒキジマイシンの収束的全合成に成功
7月17日	薬学系研究科・薬学部	細胞内物質を利用して“ひとりでに瞬く”蛍光色素
7月22日	情報学環・学際情報学府	次世代への継承を目指し、被爆者の証言や全国の生協が取り組む平和活動を公開する「コープピースマップ」開設
7月22日	本部広報課	東京大学キャンパスツアーをオンラインで再開
7月29日	教育学研究科・教育学部	海の探究学習・オンライン支援プロジェクトの開始
7月30日	本部協創課	「量子イノベーションイニシアティブ協議会」設立
7月31日	本部経理課	信用格付の新規取得について
7月31日	本部経理課	第1回東京大学債券発行に係る主幹事証券会社および事務委託銀行の選定について
8月4日	大気海洋研究所	CO ₂ に対する気候感度の不確実幅が低減
8月5日	本部環境安全課	令和2年度「東京大学安全の日」講演会 開催
8月5日	本部入試課	令和3年度大学案内・選抜要項・募集要項の公表について
8月5日	本部環境安全課	第4回 東京大学環境安全衛生スローガン募集 実施報告
8月5日	理学系研究科・理学部	人類はいかにして島に渡ったか 人口シミュレーションによる「漂流説」の検討

就任の挨拶 新理事の略歴および就任の挨拶を掲載します。

グローバル・コモンズの守護人として社会活動を駆動する大学を目指して

新型コロナは、爆発的な経済成長を遂げ科学技術で武装して無敵に見えた人類社会が、生態系との間で摩擦を起こしたことに起因し、そのリスク管理がいかに未防備であったか、社会がいかに脆弱であったかを曝け出しました。地球環境危機も、現在の経済システムが地球システムのキャパシティの限界に衝突しているという、同じ根源から発生しています。この未曾有の危機の回避には、その根本原因たる経済システムを大きく転換する以外方法がありません。化石燃料から脱却して温暖化に歯止めをかけ、資源を循環させ、食料生産・消費を変えて生態系を保全し、人間活動が集中する都市をサステナブルにする必要があります。

我々は現在、のるかそるかの分岐点にいます。もし抜本的なシステム転換がすすめば、これからの経済価値の創出や企業・産業の成長は、この転換の中から生まれてきます。しかしこうし

た転換は、これまで慣れ親しんだ習慣への決別であり、容易なことではありません。私は今年7月まで地球環境ファシリティのCEOとして国際機関の立場からこの課題を追求し、経済システムの中で意思決定を担う人々がそれぞれの矩(サイロ)に閉じこもっている限り、この問題は解決しないと実感しました。しかしここにアカデミアの役割があると確信しています。大学が伝統的な矩を超えて、産業界、官界、投資家・消費者としての市民社会と協働し、個々の行動の変容を促し経済システム転換を通じて、地球環境—人類の繁栄を支える公共財としてGlobal Commonsと称しています—を守り、次世代に渡していくための社会的な活動を駆動する。そしてこの活動を国際的に展開していく。これが今本学が果たすべき使命であると思います。志を等しくする皆様とともにこの大目標に挑戦してまいりたいと思います。



理事

石井菜穂子

ISHII Naoko

昭和56年3月 本学経済学部卒業
昭和56年4月 大蔵省(現財務省)入省
平成4年7月 IMF
平成8年7月 Harvard Institute for International Development
平成9年12月 世界銀行
平成14年7月 財務省開発機関課長
平成18年6月 世界銀行
平成18年9月 国際協力学博士(東京大学)
平成22年8月 財務省副財務官
平成24年8月 GEF(地球環境ファシリティ)CEO
令和2年8月 東京大学教授、グローバル・コモンズ・センターダイレクター
専門分野: 開発経済学、地球環境
研究内容: 1) 石井菜穂子「政策協調の経済学」日本経済出版社、1990年 2) 石井菜穂子「長期経済発展の実証研究」日本経済出版社、2003年
趣味: マラソン、スキューバダイビング



CLOSE UP

量子イノベーションイニシアティブ協議会を設立

(本部協創課)



小柴ホールで行われたQII協議会の設立記者会見の様子

7月30日、東京大学は、「量子イノベーションイニシアティブ協議会」(以下「QII協議会」)を設立しました。QII協議会は、量子コンピューティングを実現する科学技術イノベーションを日本国内において独自のかたちで集結させ、量子コンピューティングのためのエコシステムを構築することで戦略的に重要な研究開発活動

を強化し、産官学協力のもとに我が国全体のレベルアップと実現の加速化を図り、広く産業に貢献することを目的として設立されたものです。学生、教職員、産業界の研究者による研究開発やセミナー等による情報交換を通して、世界に先駆けた量子コンピューターの社会実装の実現のために連携します。



CLOSE UP

令和2年度「東京大学安全の日」講演会を開催

(本部環境安全課)



伊藤哲朗客員教授と黒田玲子助教

7月7日、「新型コロナウイルス感染への危機管理対応の問題点と今後の方向」をテーマに、「東京大学安全の日」講演会をオンラインで開催しました。生産技術研究所 伊藤哲朗客員教授が、新型インフルエンザ等対策特別措置法成立の経緯と我が国の新型コロナウイルス対応の問題点について解説し、本学の産業医である環

境安全本部 黒田玲子助教が「令和元年度事故災害報告」を行いました。また、講演に先立ち、学内で募集した「第4回環境安全衛生スローガン」の受賞作品を発表しました。総長賞には教養学部の学生、阿部勇輝さんの作品が選ばれました。今回の講演会は学内限定での開催でしたが、約330名と多くの構成員が参加しました。

集中連載 公衆衛生学からみたCOVID-19対策

医学系研究科公共健康医学専攻発

第1回 / Multi-Pronged Approach (多面的・複合的アプローチ)

本連載は、筆者が前号の学内広報「淡青評論」に記された「公衆衛生学としては(中略)ロックダウンによる封じ込め一択」という記述は誤りではないかと広報室にお伝えしたところから始まる。本拙稿を含めて連載企画に取り上げてくれた広報室に感謝したい。

さて、COVID-19などの未知の感染症に対して、公衆衛生学では人や社会への働きかけが主となるのは確かだが、ロックダウン一択ではない。公衆衛生学的アプローチの基本は、multi-pronged interventionsである。一つ一つは小さな効果でも、それらを組み合わせることで大きな効果を目指す。個人レベルの手洗い、マスク着用、ソーシャルディ

スタンシング、事業者には業種に応じた予防策の研修と器材提供、オンライン授業、イベント自粛、そして感染者隔離・接触者調査など、それぞれが完璧でなくても、全体として大きな効果を目指す。人々の理解と協力も必要だ。その上で、状況に応じた各方策の効果検証、最適な組合せを導くこと、それが科学であり、技でもある。

とりわけ、COVID-19の特徴である無症状感染者の多さと感染力の高さに応じた対策が求められる。感染者を「見える化」し、ターゲットを絞って感染機会を減らすことができる。これを実現するためには、ウイルスに対する知識だけでは十分でない。人や

組織の行動、検査や予防器材のロジスティクス、感染症に係る法・制度など、社会の全体像の把握が重要であり、衆知を集めた決断が必要だ。成果を上げた対策は広く発信し、情報共有を行うことも重要である。

最後に、市中でのマスク着用について。これには感染予防(他人に移さない)と被感染予防(移されない)が期待されるが、後者の証拠は実は少ない。空母乗組員の事例では、マスク着用者の感染率は有意に低く(MMWR 6/12)、系列病院内の全医療従事者マスク着用義務化で感染の鈍化がみられた(JAMA 8/18)。効果が実証されつつある。

小林廉毅(医学系研究科)

※「学内広報」では広告掲載を受け付けています。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。↓本部広報課(03-5841-2031)



陽子の寿命は有限か？

陽子（原子の核を形成する粒子）の寿命はとても長い（10の34乗年、つまり1の後にゼロが34個も続く年よりも長い）けれども無限ではないと予想されているのですが、陽子が自然に壊れる現象はこれまで見つかりません。陽子の寿命が何年で、どのように壊れるかを実験で調べることは、素粒子物理学のパラダイムシフトにつながると期待されるほどの、大変重要な研究テーマです。

1996年に観測を開始したスーパーカミオカンデでは、観測1年目のデータに陽子崩壊らしき信号が一例見つかりました。その頃の興奮は、20年以上たった今でも忘れません。残念ながら、のちのデータ解析アルゴリズムの改良により陽子崩壊信号ではないと判定が変わり、現在まで陽子崩壊の証拠は見つかりません。

スーパーカミオカンデ装置をさらに大型・高精度化して、陽子崩壊の発見能力を飛躍的に高めたハイパーカミオカンデ実験の構想が、1999年ごろから始まりました。巨額の子算要求のため長く苦しい期間が続きましたが、2019年12月6日の朝、本部財務課長からの電子メールにより、ハイパーカミオカンデ建設を含む経済対策が閣議決定されたことを伝えられました。プロジェクトが開始するのは間違いないと初めて確信した瞬間でした。

ハイパーカミオカンデは、地下に設置する直径68m・高さ71mの水槽に総質量26万ト

ンの超純水を貯め、内部でのニュートリノ反応等から生じる微弱な光を超高感度光センサーで捉える実験装置です。2020年8月現在、7年間の建設プロジェクトが開始され、概ね予定通りに進捗しています。この間私の頭をずっと占めているのは、プロジェクトの失敗の可能性でした。実はスーパーカミオカンデ実験や関連実験では、装置破損などの大きな事故を何度か経験してきました。過去の失敗の教訓を忘れず、事故対策を怠らず、かつ世界最高性能の装置を作る挑戦は続けて、この大型建設プロジェクトを成功させたいと考えています。

陽子崩壊は見つかるでしょうか。ハイパーカミオカンデの実験データをお楽しみに。

塩澤真人
(宇宙線研究所)



2020年7月、ハイパーカミオカンデの建設予定地に調査トンネルが到達した。ここに70メートルスケールの世界最大規模の大空洞を掘る予定。

